

草双紙の仮名遣い

——『无筆節用似字尽』寛政板と天保板との比較を通して——

矢 野 準

一

近世後期の整板本に於ける表記原理解明に資すべく、稿者は、これまで、草双紙類を資料に調査をおこなってきた。

矢野（一九九七・二〇〇〇）に於いて、草稿本の残存したも

ののうち、築地善交作
北尾重政画『竹齋老寶山吹色』三卷（寛政六1794

年刊）及び山東京伝作
歌川豊国画『諸色 買帳 吞込多靈寶縁起』三卷（享和二

1802年刊）・山東京伝作
北尾重政画『人間万事吹矢的』三卷（享和三1803

年刊）・山東京伝作『作者胎内十月圖』三卷（享和四1804年刊）

といった鶴屋喜右衛門から刊行された黄表紙類を採り挙げ
仮名遣い面から草稿本と整板本との比較対照を試みた。そ
の結果、築地善交作と京伝作三作品とで、一部、逆の表記

傾向——例えば、「故」の仮名表記に関して、善交作では草
稿本から整板本の間で契沖仮名遣的「ゆゑ」表記から定家仮
名遣的「ゆへ」表記へとという改訂傾向をもつのに対し、京伝
作品では逆に「ゆへ」表記から「ゆゑ」表記へとという逆の改
訂傾向をもつといったもの——が見られたのである。

この相違について、矢野（二〇〇〇）では「基本的には、
黄表紙板本の一般的な表記傾向に合わせる方向での改訂の
結果が、このような逆転現象を来したもので、刊行時期の
差が反映したものであろう。つまり、寛政六年の時点では
契沖仮名遣的な表記形が板本に於いてはまだ一般的ではな
く十年ほど時代の下った享和年間あたりから少しずつ変化
が見えてきたと見たい」と述べておいた。

しかし、これは、未だ単なる見通しにすぎず確としたものではなかった。そこで、その見通しの適否を探るべくいくつか仮名遣い調査をおこなったのであるが、そのうち、本稿に於いては、異板をもつ草双紙類を資料とした——ここでは初板本と板を全面的に新たに刊行したもの（再刻再板本）との——比較対照調査の一端を述べてみたい。

二

草双紙類の場合も、『鸚鵡返文武二道』のような異本をもつ作品が比較的存在することは知られている。今、調査資料として採り挙げようとするのは、もとの板木の摩滅や絵柄の古びなどの理由で、板を新たに刊行された異板をもつ作品類である。それらは、右の理由により、当然、初板刊行時よりある程度時を隔てて刊行されることが多いと思われる、その異同を見ることによって、時代による傾向差を観察できると考えるからである。

今回の調査報告に使用する資料は、鶴屋喜右衛門板の曲亭馬琴作『无(无)筆節用似字尽』である。該書は、「曲亭馬琴作、画工署名はないが北尾重政画といわれる。寛政九年(一七九七)刊。鶴屋喜右衛門版。三卷三冊。……はるか四十年後の天保十年(一八三九)には、同じ版元鶴屋喜右衛門か

ら、馬琴名作黄表紙再板シリーズの一種として再刻再板され：画工は歌川国芳に変わり、上巻八丁・下巻七丁の二巻二冊本となっている」(『現代教養文庫 一〇四〇 江戸の戯作絵本(四) 末期黄表紙集』社会思想社一九八三・三刊の解題)もので、『歌字尽』に擬した文字絵尽しの趣向：半丁乃至は見開き一丁毎に、見立て文字絵「似た字」を並べそれを読み込んだ歌の画面右側に対し、それに合せた情景風俗絵を左側に配し「棚橋(一九八九)五六七頁)たものである。本文についても、棚橋(一九八九)の五六七～五六八頁に天保板の説明として

序文は刊記を除き他は全文初板に同じ。本文も初板をほぼそっくり再刻したものであるが、順序不同、一丁から五丁オモテまでは初板のまま、続く五丁以降は次の如し(カッコ内は初板の丁数)。

五ウ・六オ(六ウ・七オ) *上冊を一八丁、下冊を九丁十五丁で構成する故の順不同と考えられる。

六ウ・七オ(七ウ・八オ) 七ウ・八オ(八ウ・九オ)

八ウ(五ウ) 九オ(六オ) 九ウ・十オ(九ウ・

十オ) 十ウ(十ウ) *以下順序同

とあるように、内容的にはほぼ同一本文であるが、仮名遣いなどの表記的な面では種々差異が認められるようである。

寛政板は『現代教養文庫 一〇四〇 江戸の戯作絵本(四) 末期黄表紙集』(社会思想社一九八三・三刊)の影印(底本Ⅱ国会図書館、都立中

中央図書館東京資料蔵本を、天保板は国立国会図書館蔵本のコピーを、各々、調査テキストとして使用した。調査範囲は、序文および絵組み中の文字を除いた本文と詞書き部分とした。なお、挙例の際など、寛政板を「寛」、天保板を「天」と略記することがある。

三

具体的に、仮名表記の実態をみていくことにしよう。

「い・ひ・ゐ」の表記

語頭については、次に示すのが当該語とその表記である。^{注二}

概して、「い」表記が多く、天保板で改訂された例は少ない。

「いう(言) || イイ18 | イ」・「いきる(生) || イイ」・「いき(粹) || イイ2」・「いし(石) || イイ」・「いず(出) || イイ」・「まないた(俎) || イイ」・「いつ(何時) || イ」・「いと(糸) || イイ3」・「いね(稲) || イイ2」・「いのち(命) || イイ」・「いま(今) || イイ」・「いも(芋) || イイ」・「いる(居) || 牛牛7」・「いる(射) || 牛牛」・「いる(入) || イ」・「いろ(色) || イイ」・「い(衣) || 牛イ」・「いち(一) || イイ」

振り仮名「いかる(怒) || イイ」・「いし(石) || イイ」・「いる(入) || イイ2」・「いち・いつ(一) || イイ2 | イ」

草双紙の仮名遣い

2

「射る」の「ゐ」表記を別にとすると、概ね、伝統的表記である。改訂されたものは、単例ながら初板で「ゐ」表記されていた「衣」でこれを契沖仮名遣的な「い」表記に改めた例である。

語中尾については次の通りで、これも、概して、寛政板の表記をそのまま天保板に採っているものが多い。

「おい || イイ」・「おいらん || イイ2」・「くわい(慈姑) || 牛牛」・「ござる || イイ」・「せい(背) || イイ」・「びいらしゃら || イ」・「ひたい(額) || イヒ」・「やまい(病) || ヒヒ」・「あい(愛) || イイ」・「けい(慶) || イイ4」・「けい(稽) || イイ」・「げい(芸) || イイ」・「さい(才) || イイイイ」・「さい(細) || イイ」・「せい(生) || イイ」・「せい(精) || イイ」・「せい(西) || イイ」・「てい(亭) || イイ」・「ない(内) || イイ」・「れい(靈) || イイ」・「ハ行活用動詞類へヒ」語形 || ヒヒ9 | イヒ5」・「カ行活用動詞類イ音便形 || イイ6 | ヒイ2」・「形容詞類へイ」語形 || ヒイ14 | イイ8 | イ2 | ヒヒヒ」・「助動詞たい || イイ」・「助動詞まい || イイ | イ」

振り仮名「さい(災) || イイ」・「せい(西) || イイ」・「たい(太) || イイ2」・「てい(亭) || イイ | イ」・「ない(内) || イイ」・「ハ行活用動詞類へヒ」語形 || ヒヒ2 | 牛ヒ」

異同の見られるものは、用言の活用語尾類が主であるが、それ以外のものでは「額」の場合、初板の「い」表記が、再板ではやはり、契沖仮名遣的な「ひ」表記に改訂されている。

八行活用動詞類へヒ語形の場合、原則的な「ひ」表記が採られることが多いものの、寛政板に於いては「い」表記も採られていた。それらも

1 (寛)／へおすい／ものは／引かへに／なるによ(上)
3ウ) V(天)／へおすひ／ものは／ひきかえに／なるによ(上)3ウ)

2 (寛) 囲(中9ウ) V(天) 囲(下9ウ)
や、注一のAの傍線部などの様に、天保板では原則的な「ひ」表記に改められている。

カ行活用動詞類イ音便形の場合も、次の3の例に見られる通り、同様の傾向を示す。

3 (寛)／つりをして／ゐる所をかひて／みせければ(下)11ウ) V(天)／つりを／してゐる／所を／かいて／見せければ(下)11ウ)

形容詞類へイ語形でも、

4 (寛)／ふかひと／あさひは／まぶと／きやく／こひと／うすひは／まぶと／うそ(上)4ウ5オ) V(天) ふかいとあさいはまぶときやく／こひとうす

いはまぶと／うそ(上)4ウ5オ)のように、「濃い」が「こひ」表記のままであることを除けば、原則的な表記に改められている。

「え・へ・ゑ」の表記

語頭の表記に該当するものは、「えん(縁)」「エエ」と振り仮名「え(絵)」「エエ」・「えつ(越)」「エエ」である。振り仮名の場合は、寛政板天保板ともに契沖仮名遣的な表記形で異同がない。「縁」については、天保板で契沖仮名遣的な「え」表記に改訂されている。

語中語尾についても、

「かえす(返)」「へへ」・「かえる(帰)」「へへ」・「つえ(杖)」「エエ」2」・「つきずえ(月末)」「エエ」・「つくえ(机)」「エエ」・「なえ(苗)」「エエ」・「まえ(前)」「へへ」3」・「ゆえ(故)」「へエ」2」・「助詞さえ」「へへ」・「ハ行活用動詞類へへ語形」「へへ」9」・「ハ(ヤ)行活用動詞類へへ(エ)」「語形」「エエ」「へエ」「ユエ」2」・「ヤ行活用動詞類へエ語形」「へエ」3」

振り仮名「かえる(回)」「へへ」・「なえ(苗)」「エエ」

と、異同のあるものは、挙例5～7の「杖」・「末」・「故」や「机」のように、天保板で契沖仮名遣的な表記形に改められているようである。

5 (寛) はしこに／つえ一ばんかいて返事をつかはし

ければ (㊥2オ) ∨ (天) はしこに／つゑ一ぽんかい
て返事をつかはしければ (㊥2オ)

6 (寛) さてはつきづえにのぼらふと／いひこしたり
(㊥2オ) ∨ (天) さてはつきづゑにのぼらふと／い
ひこしたり (㊥2オ)

7 (寛) やぶの／中にてへをひり／しゆへおさな名を／
弥次郎と申ス (㊥1ウ) ∨ (天) やぶの中にてへを／
ひりしゆゑをさな／名を弥次郎と申ス (㊥1ウ)

「ハ(ヤ)行活用動詞類へ(エ)語形」として示したのは、
挙例1波線部「ひきかえ」や

8 (寛) 奴といふ／文字に心を／そへれば／怒とよみ／
ちからを／そへれば／努／と (㊥6ウ) ∨ (天) 奴と
いふ／文字に心を／そへれば／怒とよみ／ちからを／
そゆれば／／努と／よむ (㊥5ウ)

など、本来ハ行活用であったものが中世期にヤ行にも活用
するようになった動詞類である。次の9に示した「吠える」
のようなヤ行活用動詞類と同様に、天保板ではヤ行の表記
に統一されており、ヤ行活用として統一したもののよう
である。

9 (寛) 犬に／ほへられても／はらがたつ (㊥13ウ)
∨ (天) 犬にほえられ／てもはらがたつ (㊥13ウ)

なお、助詞「へ」は「へ」表記で安定している故ここでは

採りあげなかった。

「お・ほ・を」の表記

語頭について、該当するのは

「接頭辞お」オオオ5 オ・「おいら」オオ・「おいら
ん」オオ2・「おおい(多)」オオ2・「おかもち(岡
持)」オオ・「おき(沖)」オオ・「おく(置)」オ・
「おけ(桶)」オオ・「おこなう」オオ・「おさない(幼
類)」オオ3・「おしえる(教)」オオ・「おそい(遅)」
オオ2 オ・「おち(落)」オオ4・「おと(音)」オオ・
「おなじ(同)」オオ オ4・「おのれ(己)」オオ2・
「おの(小野)」オオ・「おぼしめす(思召)」オオ・
「おも(思)」オオ3 オ3・「おもしろし」オオ・
「おや(親)」オオ4・「およそ(凡)」オオ2・「おり
(折)類」オオ2・「補助動詞おる」オオ
振り仮名「おとこ(男)」ヲ・「おの(小野)」ヲ・
「おも(思)」オオ・「およそ」ヲオ・「おんな(女)」
ヲ

などで、寛政板天保板共通表記のものは、「岡持ち」を除き、
契沖仮名遣的な表記とも合致している。また、異同を持つ
ものは、挙例7波線部「幼名」のように、天保板ですべて、
契沖仮名遣的な表記に改められている。

語中尾については、

「おおい(多) || ホホ2」・「きおい(俠客) || ヲホ」・「さ
お(竿) || ホヲ2」・「とおる(通)類 || ヲホ」・「なお(猶)
|| ヲホ」・「なおす(直) || ヲホ」・「ほお(頼) || ウウ」
(^{注五}「におう(匂) || ホホ」)

振り仮名「あお(青) || ヲ2」

右のように比較的異同が多いが、多くは

10 (寛) へかんじんの事がない / 吉例のとをり / めで
たしく (㊦15ウ) V (天) へかんじんの / 事がない /
吉例の / とほり / めでたしく (㊦15ウ)

など、概して、天保板で契沖仮名遣的な表記に改訂してい
るようである。

なお、助詞「を」も、該当する語であるが、安永期あたり
では『金々先生栄花夢』など「お」表記がされた例はあった
が、この時期には「を」表記で定着しているため、ここで
は採り上げなかった。

「う・ふ」の表記

以下にみられるように、比較的異同は少ない。

「こう(此様) || ウウ2」・「どう(如何) || ウウ3」・「お
うぎ(扇) || フフ3」・「きょう(今日) || フフ」・「もうけ
る(儲) || ウウ」・「八行活用動詞類へフ語形 || フフ26」フ
(ウウ)・「動詞類ウ音便形 || フフ」・「形容詞類ウ音便形
|| フフ」・「助動詞う || フフ3」フウ2 ウウ2・「助動詞

そうだ || ウウ2 フウ2」・「助動詞ようだ || ウウ」・「助
詞のう || ウウ」・「ふう(風) || ウウ」・「おう(王) || ウウ」・
「きゅう(久) || ウウ」・「きゅう(裘) || ウウ」・「こう(光)
|| ウウ」・「こう(行) || ウ」・「しゅう(宗) || ウウ」・
「しゅう(終) || ウウ2」・「じゅう(重) || ウウ」・「しよ
う(証) || ウウ」・「しよ(象) || ウウ」・「しよ(鐘) ||
ウウ」・「しよ(生) || ウウ3」・「しよ(請) || ウウ」・
「じよ(盛) || ウウ」・「そ(総) || ウウ」・「そ(草)
|| ウウ」・「ちゅう(中) || ウウ」・「ちゅう(頭) || ウウ2」・
「ちよう(丁) || ウウ3」・「ちよう(鳥) || ウウ」・「ちよ
う(提) || ウウ2」・「とう(盜) || ウウ」・「とう(灯) || ウ
ウ3 ウン」・「とう(豆) || ウウ」・「とう(頭) || ウウ」・
「どう(道) || ウウ」・「のう(能) || ウウ2」・「ひよう(拍)
|| ウウ2」・「ほう(包) || ウウ2」・「ほう(宝) || ウウ」・
「ほう(朋) || ウウ」・「ぼう(坊) || ウウ3」・「ぼう(棒)
|| ウウ」・「みよう(明) || ウウ」・「もう(盲) || ウウ2」・
「ゆう(友) || ウウ」・「よう(様) || ウウ6」・「りゅう(流)
|| ウウ」・「りよう(料) || ウウ2」

振り仮名「八行活用動詞類へフ語形 || フフ5」・「形容詞類
ウ音便形 || ウウ」・「ふう(風) || ウウ2」・「おう(王) ||
ウウ」・「きゅう(求) || ウウ」・「きょう(京) || ウ」・
「こう(候) || ウウ」・「こう(公) || ウウ2」・「こう(江)

「ウウ」・「こう(香)ウウ」・「こう(合)フ」・「しゅ
う(周)ウウ」・「じゅう(十)ウウ」・「しょう(消)ウ
ウ」・「しょう(姓)ウ」・「しょう(生)ウウ」・
「じょう(上)ウ」・「じょう(常)ウウ」・「ちょう
(丁)ウウ」・「ちょう(帳)ウ」・「ちょう(鳥)ウ
ウ」・「どう(道)ウウ」・「ほう(法)ウウ」・「ぼ
う(望)ウウ」・「よう(用)ウウ」・「りょ
う(両)ウウ」・「ろう(郎)ウ」

異同のあるものについては当該語の表記にユレも見られる。
例えば、助動詞「う」では

11 (寛)／こうもあらふか(㊥10オ) ヴ

(天)／かうもあらうか(㊥10オ)

12 (寛)／へおら／二十四文やの／二合／さま／に／せ

ふ(㊥11オ) ヴ(天)／へおら／二十四文やの／二

合さま／に／せう(㊥11オ)

13 (寛)／このごろにをきづりと／でやせう(㊥12オ)

ヽ(天)／このごろ／に合印／合印おきつりと／で

やせう(㊥12オ)

右の1112のように、寛政板の「ふ」表記を天保板で「う」表
記に改めるものがある一方で、6波線部のように寛政板天
保板ともに「ふ」表記であったり、また、13のように寛政
板天保板ともに「う」表記であったり、未だユレの状態に

ある。

なお、ハ行活用動詞類へフ語形で、()中に示した原則
的表記と異なる「う」表記のものは、注五で触れた「匂う」
で、これを別にすればすべて原則表記で安定している。こ
の点からも「匂う」と分節することにとめらいを感じるもの
である。

「は・わ」の表記

該当する語と対応表記形は以下の通りである。

「よしわら(原)ウハハ2」・「かわせみウハハ」・「かわ
る(替)ウハハ」・「くつわ(轡)ウワワ」・「くわい(慈姑)
ウワワ」・「こわい(怖)ウワハ2」・「つかわす(遣)ウハ
ハ」・「にかわ(膠)ウハハ」・「にわとり(鶏)ウハハ2」・
「まわる(回)ウハハ」・「ハ行活用動詞へハ語形ウハハ10
ワハ4」・「助詞わウハハ」・「助詞わいウハハ」・「か(嘩)
ウハク」・「かん(勧)ウワク」・「こう(光)ウコク」

振り仮名「ことわざ(諺)ウハワ」・「か(禍)ウワク」

概して、契沖仮名遣的表記形と一致するものが多く、この
場合も、異同をもつものについては

14 (寛)／疑心生闇鬼と／こわひくと／思ふときは／

いなむらも／ばけものと／思はれ(㊥9ウ) ヴ

(天)／疑心生闇鬼といふどく／こはいくと／思ふとき
は／いなむらもばけもの／とおもはれ(㊥9ウ)

15 (寛)／おいらんの／せりふにいわく(㊤4ウ) V

(天)／おいらんのせりふにいはいく(㊤4ウ)

と、14のように天保板で契沖仮名遣的表記形に改められたり、15のように原則的な表記形に改められたりしている。

また、合拗音表記は、当該語は単例であるが、総じて「くわ」表記傾向が強いようである。特に、天保板では例外なく「くわ」表記で統一されている。

なお、助詞「は」については、小松(一九八六)で指摘されるように、青本の時代には「は」「わ」と表記にユレが見られるが、ここでは、助詞「へ」・「を」の場合と同様に、既に「は」表記で、異例が見られないので、採り上げなかった。

「じ・ぢ」の表記

指定辞「じゃ」や、助詞「では」の変化形「じゃ」などについては、既に「じ」表記で安定していると思われるのでここでは採り上げないが、その他、当該の語とその表記は次の通りである。

「じゃり(砂利) || ジジ2」・「じゃ(者) || ジジ」・「じゅう(終) || ジジ2」・「じゅう(頭) || チヂ2」・「じょう(象) || ジジ」・「じょ(書) || ジジ2」・「じん(心) || ジジ2」・「じ(事) || ジジ」・「じ(字) || ジジ7 ジジ2 ジ」・「じ(地) || チヂ」・「こじつけ || チヂ」・「まじる(混) || ジジ」・「かじる(齧) || チヂ」

振り仮名「つじ(辻) || チ」・「じゃ(者) || ジジ」・「じゅ

(授) || ジジ」・「じゅ(壽) || ジジ」・「じゅう(十) || ジジ」・

「じょ(除) || ジジ」・「じん(心) || ジ」・「じ(字) || ジ5 ジ3」

ほとんど寛政板天保板とも同一の表記で、概ね、契沖仮名遣的な形と一致しているようである。

「ず・づ」の表記

当該語と表記形は次の通り。

「ず(洲) || ズズ」・「ず(頭) || ツ」・「つきずえ(月末) || ツツ」・「ずき(好) || ズズ3」・「づくし(尽) || ツツ」・「づち(槌) || ツツ」・「くず(屑) || ズズ」・「すずり(硯) || ズズズ」・「きず(傷) || ツズ」・「ねずみ(鼠) || ズズ2」・「よろず(万) || ツツ」・「みみず(蚯) || ズズ」

振り仮名「づくし(尽) || ツツ」・「づけ(付) || ツツ」

この場合も、概ね、原則的な表記が採られているようである。異同のあるものについては、やはり、次の16のように天保板で契沖仮名遣的に改められている。

16 (寛)／とだなへねづみが出たさうた(㊤13オ) V
(天)／とだなへねづみが出たさうだ(㊤13オ)

本来「ず」表記が求められる「月末」については、寛政板天保板ともに、挙例6にある通り、「づ」表記されているが、

これは挙例5に続く部分で、「突き杖」の絵を「月末」と読み解くもので、そのための例外的表記と考えるべきものである。

なお、助動詞「ず」についても、「ず」表記で安定しているため、ここでは採り上げなかった。

開合表記など

以下に示すようなものが、問題になるうか。

「おうぎ(扇) || アフア3」・「きょう(今日) || ケフ」・「こ
う(此様) || コカ2」・「どう(如何) || トウ3」・「助動詞
そうだ || サウ2 サフサ2」・「助動詞ようだ || ヤウヤ」
「王 || 王^六 || 光 || 光^六 || 行 || 行 || 証 || 証 ||
「象 || 象 || 鐘 || 鐘 || 生 || 生 || 盛 || 盛 ||
ウ^六 || 請 || 請 || 総 || 総 || 草 || 草 || 丁 ||
ウ^六 || 鳥 || 鳥 || 提 || 提 || 重 || 重 ||
ウ^六 || 盗 || 盗 || 灯 || 灯 || 豆 || 豆 || 頭 ||
ウ^六 || 道 || 道 || 能 || 能 || 拍 || 拍 ||
「包 || 包 || 宝 || 宝 || 朋 || 朋 || 坊 || 坊 ||
3」・「棒 || 棒 || 明 || 明 || 盲 || 盲 || 様 ||
ウ^六 || 料 || 料 || 2 ||
振り仮名「王 || 王 || 京 || 京 || 侯 || 侯 || 公
	江		江		香		香		合		合					
	消		消		上		上		常		常		姓		姓	
	上		上		常		常		姓		姓					

草双紙の仮名遣い

「生 || 生 || 丁 || 丁 || 帳 || 帳 || 鳥 || 鳥 ||
ウ^六 || 道 || 道 || 法 || 法 || 望 || 望 ||
|| 用 || 用 || 両 || 両 || 郎 || 郎 ||

「此様」などについては、天保板に原則的な表記の意識が見られるようであるが、字音語の開合表記については、該当漢字によって、安定性に差が見られるように思われる。ただ、用例数が少ないこともあり、確実なことはいない。だ。「生」・「姓」・「請」・「丁」・「明」など、漢音「eい」表記をもつものの呉音表記に相当すると思われる部分については、本来的な「-ja」表記ではなく、「-eう」表記するという統一志向を見ることができそうではある。しかし、それとても厳密におこなわれているとはいえず、字音語の開合表記の安定度に関しては、未だしの感が強い。

四

前節で述べたことを一言でいえば、若干の例外はあるものの天保板に原則的或いは契沖仮名遣的傾向の表記志向が目立つということになるうか。そのことは、第一節で問いかけた「見通しの適否」についての答ともなりそうである。つまり、天保期の再板に右の様な志向性が見えるということとは、時代的な要因を十分に考え得るということであり、

不都合な見通しではないと思われるのである。

矢野(二〇〇〇)で『竹斎老實山吹色』の実態をもとに、寛政期の板本に於ける仮名表記の統一性志向について、「いくぶんかその萌芽は見られるものの、明確な姿をとっているとはいいがたく、その途上にあるかの様で、時には定家仮名遣的な表記も散見する」とし、矢野(一九九七)で京伝三作品をもとに、享和期の板本に於けるそれを、「表記統一の志向が感じられる。一部に見られる契沖仮名遣的な表記もその傾向の一端である」と述べたのであるが、天保期のそれに至ってさらにその傾向——特に、契沖仮名遣的な表記志向——が強まったといっても過言ではないようである。^{注八}

勿論、草双紙中のほんの一握りの資料からの推測のことであるが、先の見通しをいくぶん補強するものとなったかと思われる。その点で、久保田(一九八六)が仮名草子類のような近世前期の資料の定家仮名遣に近い表記傾向にあることを指摘し、原口(一九九一)が天保弘化期の歌書類を資料とし契沖仮名遣の一般化を指摘しているのは、草双紙と性質を異にする資料とはいえ、近世期の大きな流れの中で、すべて類似の方向にあることとして、興味深い。

注

一 以下のAのような係結びの修正や、Bのような本文の整備など、天保板において、かなりの配慮がみられるようである。

A (寛)／両なるこ久はいなむらかこいかごしかふしてこそくまでなりけり(㊥9ウ) V (天)／両なるこ久はいなむらかこひかごしかふしてこそくまでなりけり(㊦9ウ)

B (寛)／やつこさけを／のめば心つよく／なりてちからが／つよくなる奴は／よくつとめ／心つよくなる(㊧6ウ) V (天)／やつこさけを／のめばこゝろつよく／なりてちからが／つよくなるかゝる／奴は又よくつとめ／心あらくなる(㊨5ウ)

二 当該語の該当部分をゴチックで示し、傍線部分に寛政板と天保板との表記形を片仮名で示した。その後の数値は対応箇所例数であるが、一例の場合には例数を略してある。「いう(言)ㄥㄣㄣイ18 イ」は、動詞「言う」の語頭部分を「い」表記するものが、寛政板天保板ともに十八箇所、天保板のみ一箇所、認められるということである。なお、異同部分に「※」印を付したものはそこが仮名表記ではなく漢字表記されておりその漢字に施された振り仮名によることを示す。以下も同様。

三 類としたのは、複合語や転成語などをも含めたためである。このため、所謂、未然形・連用形・終止形などに相当するものもへへ語形・へへ語形・へへ語形などと仮称した。

四 当該語は、現在、「つくえ」が伝統的な表記形とされるようであるが、契沖仮名遣では「つくゑ」とされていた。

五 当該箇所は、

C (寛)／いろはに／ほうの／あかひやつ／へのじ
に／引た／まみへ／より／はなは／ちり／ぬる／御用心／
く (㊥7ウゝ8オ) V (天)／いろはに／ほうの／あ
かいやつ／へのじに／引た／まみへ／より／はなは／
ちりぬる／御用心／く (㊥7オ)

とあるが、『戯作絵本』では「におう」と翻字し、「原文」には
う。「イロハニホウ」色は匂うで」と注してあり、「匂う」
と分節解釈しているが、稿者は行移り位置や使用仮名字種、
助詞「の」と「赤い」とのつながりなどから「頬」と解釈してみ
た。「頬の赤い奴」でも臭いとの関連づけは可能と思われる、
「眉」「鼻」と「頬」とは顔面上のもので関連性もあり、この
解釈の可能性も十分あり得よう。「いろはに」が文字通りい
ろは歌の冒頭のままであるところが難点といえるが、一往の
解として提示した。それ故、「匂」を () に示すことにした。

六 本来「ウオ」のように示すべきかとも思うが、字音語の開
合表記を明示するため当該箇所をローマ字で示した。

七 「用」字の振り仮名の場合のように、天保板で字音仮名遣
に改訂統一されるものも見られはするが、一律ではない。

八 ここでは採り上げなかったが、序文でも、寛政板と天保板
とで仮名遣いの異同が見られ、例えば、

(寛) 遂に字を作^{つく}り (㊥1オ) V

(天) 遂に字を作^{つく}り (㊥1オ)

のように天保板で契沖仮名遣的表記に改められているので
ある。

草双紙の仮名遣い

参考文献

- 久保田篤(一九八六)「近世初期版本の仮名づかい」(『国語国文
63の12』一九八六・一二)
小松寿雄(一九八六)「江戸語の仮名遣小考」(『築島裕博士
集』明治書院一九八六・三刊)
棚橋正博(一九八九)『日本書誌学大系48(2)黄表紙総覧中篇』青裳
堂書店一九八九・九刊
原口 裕(一九九一)「幕末期通俗歌書の歴史的仮名遣い」(『女
子大文学(国文篇)42』一九九一・三)
矢野 準(一九九七)「黄表紙類(草稿本・整板本)の表記——京伝
黄表紙三種を中心に——」(『香椎潟42』一九九七・
三)
矢野 準(二〇〇〇)「黄表紙類(草稿本・整板本)の表記(二)——
『竹斎老賣山吹色』を資料として——」(『香椎潟
46』二〇〇〇・一二)